第4学年2組国語科学習指導案

町田市立　小山小学校
2026年11月13日（金）5時間目
対象　第４学年２組　３３名
指導者　教諭　増田　拓己

1 単元名 「物語を読んで、いろいろな考えを交流しよう」
教材名 「ごんぎつね」（光村図書「国語 四下」）

2 単元の目標

○言葉には性質による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにすることができる。（〔知識及び技能〕(1)オ）
○「読むこと」において、登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像することができる。（〔思考力，判断力，表現力等〕C(1)エ）
○「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつことができる。（〔思考力，判断力，表現力等〕C(1)オ）
○「読むこと」において、文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気づくことができる。（〔思考力，判断力，表現力等〕C(1)カ）
○言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。（〔学びに向かう力，人間性等〕）

3 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準	①言葉には性質による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにしている。【(1)オ】	①登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像している。【C(1)エ】 ②文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもっている。【C(1)オ】 ③文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気づいている。【C(1)カ】	①進んで文章を読んで理解したことに基づいて感想をもち、学習の見通しをもって、登場人物の気持ちの変化について考えを深めている。

4 単元構想

（1）児童について（児童観）

本学級の児童はこれまで、「読むこと」領域の物語文として、「白いぼうし」「一つの花」「友情のかべ新聞」を教材として学習してきた。「白いぼうし」では、「ファンタジー」というジャンルを楽しみながら、物語の「不思議な点」を「問い」としてたくさん挙げ、クラスの「問い」を解決していくという学習をした。「一つの花」では、単元の終末部で、「ゆみ子にお父さんのことを伝えるべきだろうか。」という「問い」に対して、本文中の叙述や、自身の生活経験を根拠にして、一人一人が自分の立場とその理由を文章にして表現することができた。また、それをクラス全体で共有していく中で、一人一人の考え方や感じ方の違いに触れる姿も見られた。「友情のかべ新聞」では、「ミステリー」という文種に親しみながら、本文の叙述を基に、事件の真相を一人ひとりが推理した。推理の交流を通じて、着目した叙述の違いや推理の違いに気付き、友達の考えを踏まえて自分の推理を深めていく姿が見られた。

本単元は、4つ目の物語文として位置付け、これまで既習の物語文の読み方を生かしながら読み進めていく。こ

れまで、文章を読んで、様々な叙述に対して「問い」をもつことができているため、本単元における文章においても「問い」をできるだけ多く生み出し、授業展開に生かしていく。また、自分の考えをもつということについては、できている児童も多い一方で、中々その段階に至らない児童も一定数いるのが現状である。「気持ち」という単語レベルから考えの形成を始めることで、考えをもつことが苦手な児童に対する学習のハードルを下げ、クラス全体が学習の土台に立てるよう支援していく。また、本学級の児童は、自分の考えを他者と伝え合うことに魅力を感じている児童が多い。それ自体は悪いことではないが、交流の際も言いっぱなしになってしまう児童も少なくない。そのため、本時の共有の時間には、共有の意義と、共有の視点を明確にして伝え、「一人一人の感じ方などに違いがあることに気付く」という指導事項を達成できるようにしていく。

（2）教材について（学習材観）

「ごんぎつね」は、新見南吉による文学的文章であり、『校訂 新見南吉全集 第三巻』に収録されている。いたずらばかりする小ぎつねの「ごん」が、「兵十」に対する罪の意識から、つぐないとして食べ物を届けるようになる。その行動を勘違いした「兵十」によって「ごん」はうたれてしまうが、「ごん」が罪をつぐなおうとしていたことを知り、火縄銃を落とす場面で物語は幕を閉じる。物語全体を通じて、「ごん」と「兵十」の関係や、「兵十」に対する「ごん」の気持ちが複雑に変化していく点が、この物語の魅力であるといえる。特に、最終場面の「ごん」と「兵十」の気持ちは、行動描写と文脈を基に、一人一人が異なる解釈を示すことが予想される。

研究主題の視点に立ち戻ると、「ごん」や「兵十」の気持ちを考える過程で「自己理解」が促され、それを他者と共有し、違いに気づくことで「他者受容」が育つ。また、毎時間の「振り返り」を通じて、「ごん」や「兵十」の気持ちの読み取りを客観的に把握し、次時のさらなる深まりへとつなげていく。

（3）単元について（単元観）

「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 国語編」第3学年及び第4学年の「C 読むこと」における、本単元の特に重視する指導事項は、「オ 文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと。」及び「カ 文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くこと。」である。特に「共有」の指導事項については、これまでの単元でも重視してきており、「一人一人の感じ方などに違いがあることに気付く」についてはおおむね達成できているといえる。第5学年及び第6学年では、「カ 文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること。」という指導事項の記述がある。本単元では、当該学年の指導事項の達成を目指しつつ、高学年の指導事項でもある、「自分の考えを広げること」についてもねらいとしていく。

具体的には、本時の学習で「うたれたごんは、どのような気持ちだっただろうか。」という学習課題に対して、当初の考えと、交流後の考えの比較を通じて、「自分の考えの広がり・深まり」を実感できるようにしていく。

5 研究主題に迫るための手だて

【自己理解】

①振り返りの蓄積の工夫

・自分がこれまでどのようなことを学び、どのような考え方をしてきたのか、一人一人が客観的にとらえられるようにするため、毎時間の最後に振り返りを行う。視点をすべての教科・すべての単元で統一することで、日常的な活動とし、自分の考え方や学習の状況を把握することにつなげる。

②自分の考えを明確化する工夫

・意見交流の前に、自分が課題に対してどのように考えるか、一人一人が言語化することを重視する。単語レベルでも良いので、自分の考えをもっておくことで、他者との意見交流の際の考えの深まりの実感につながる。

③帯活動「ごん日記」による自己の読みの変容の可視化の工夫

・単元を通して、その時間に読み深めたごんの気持ちを「ごん日記」として書き記し、蓄積していく。各時間の「今の自分の読み」を蓄積し、単元の終末部でそれらを読み返すことで、文章に対する自己の読みの変容を自分で認知し、兵十の立場から日記を書く言語活動へとつなげていく。

④場面ごとの読みを掲示にして残す工夫

・毎時間の授業で、クラス全体の読みを模造紙に残し、教室内に掲示しておく。児童が日常から目にすることで、毎時間の「前時の振り返り」の時間を短縮するとともに、前時から本時にかけて、自分の読みがどのように変容したのかを客観的・視覚的にわかりやすくする。

【他者受容】

①多様な考えが想定できる課題設定の工夫

・本単元では、毎時間の課題を、児童一人一人の考えや立場ができるだけ分かれるようなものに設定する。例えば、本時の課題「うたれたごんは、どのような思いだっただろうか。」については、「うれしい気持ち」などと肯定的に捉える児童と、「悲しい気持ち」などと否定的に捉える児童とに分かれることが想定される。「気持ち」だけでなく、その背景にある理由や根拠を含め、多様な考えにふれる活動を通じて、自分とは異なる考え方を学びに取り入れようとする態度を涵養する。

②考えの変容を客観視する工夫

・考えの交流後には、「考えが変わったか」「なぜ変わったのか」「変わらなかった理由は何か」を振り返らせることで、他者との関わりが自分の考えにどのような影響を与えたのかを自覚できるようにする。自分と異なる考えを受け止めながら、自分の読みを広げたり深めたりする態度を育てていく。

6 単元の指導と評価の計画（全12時間扱い）

次	時	学習活動	指導上の留意点	評価規準 ○方法
1	1	①題名やリード文から、物語を想像する。 ②「ごんぎつね」を読み、初発の感想をまとめる。	・文章を読む前に、題名やリード文を読み、物語についての想像を膨らませて関心をもたせる。 ・これまでの物語文の学習を想起させ、クラス全体で考えたい問い（深めていきたい問い）を考えさせる。	・登場人物の行動や出来事についての問いをもち、探究しようとしている。 ○発言・ノート
	2	③前時に書いた初発の感想の交流や、「問いをもとう」「目標」を基に、学習課題を設定し、学習計画を立てる。 ④語句の意味を調べる。	・初発の感想を交流し、子供たちの中から出てきた問いを基に学習計画を一緒に立てていく。	
2	3	⑤「1」の場面について、「ごん」の行動と気持ちを確かめる。	・本文の叙述を根拠にしながら、「ごん」と「兵十」の気持ちを想像して、まとめさせる。 ・友達との交流を通じて新たに気づいたことや修正したいことを、適宜書き加えさせる。	・言葉には性質による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにしている。 ・登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像している。 ○観察・発言・ノート
	4	⑥「2」の場面について、「ごん」の行動と気持ちを確かめる。		
	5	⑦「3」の場面について、「ごん」の行動と気持ちを確かめる。		
	6	⑧「4」～「5」の場面について、「ごん」の行動と気持ちを確かめる。		
	7	⑨「6」の場面について、「兵十」の行動と気持ちを確かめる。		
	8	⑩「ごん」と「兵十」の気持ちの変化について、考えをまとめて、話し合う。	・これまで考えてきたことを基に、気持ちの変化を捉えさせる。	・登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具

				体的に想像している。 〇観察・発言・ノート
	9 本時	⑪「6」の場面について、「ごん」の気持ちを想像し、自分の考えをまとめ、話し合う。	・これまで考えてきたことを基に、「ごん」の気持ちを想像する。 ・友達との交流を通じて、自分と同じ考えや違う考えに触れ、自分の考えを深められるようにする。	・文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもっている。 ・文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付いている。 〇観察・発言・ノート
3	10	⑫「1」～「6」の場面を踏まえ、「6」の場面の兵十の日記を書く。	・「兵十」の気持ちの変化をもとに、「兵十」の「ごん」に対する気持ちを日記の形で言語化させる。	・文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもっている。 〇ノート
	11	⑬前時で書いた日記を交流し、友達との感じ方や考え方のちがいについて、気付いたことをまとめる。	・友達との交流を通じて、自分と同じ考えや違う考えに触れ、自分の考えを深められるようにする。	・文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付いている。 〇発言・ノート
4	12	⑭「言葉を分類しよう」を読んで、言葉の分類のしかたを確かめる。	・「ごんぎつね」に出てきた言葉を分類させる。	・言葉には性質による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにしている。 〇ノート

7 本時の学習（9／12時間）

（1）本時のねらい

・「6」の場面の「ごん」の気持ちを想像し、自分の考えをまとめることができる。

・友達との考えの交流を通じて、自分の考えを深めることができる。

（2）展開

	学習活動	・指導上の留意点 ○評価(評価方法)
導入	1 前時までの学習を振り返る。 ・「兵十」は、「ごん」のことをにくんでいたが、くりを届けてくれていたのが「ごん」だと知って、驚いていた。 ・「ごん」は、いたずらばかりしていたが、つぐないの思いから、「兵十」にいわしやくりを届けるようになった。	・ワークシートや教室掲示を見返しながら、前時までの学習と、本時の学習を関連付けさせる。
	2 「6」の場面の内容について確認する。 ・「兵十」は、ぬすみにきたと勘違いして「ごん」を火縄じゅうでうった。その後、くりを届けてくれたのが「ごん」だと知り、「ごん」に問いかけた。 ・「ごん」は、「兵十」の問いかけに対し、ぐったりと目をつぶったままうなずいた。	・「兵十」と「ごん」、それぞれの立場から、「6」の場面の出来事を想像させる。
	3 本時のめあてを確認する。 **うたれたごんは、どのような思いだっただろうか。**	
展開	4 自分の考えとその根拠をまとめる。自 ・悲しかったと思う。なぜなら、くりを届けていただけなのに、いたずらばかりするきつねだと勘違いされて、うたれてしまったから。 ・おどろいたと思う。なぜなら、いつも通りくりを届けにきただけなのに、突然火縄じゅうでうたれてしまったから。 ・うれしかったと思う。なぜなら、「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」と、兵十に自分の行いを気づいてもらえたから。 ・うれしかったと思う。なぜなら、火縄じゅうでうたれて痛いはずなのに、「ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました」とあり、最後の力をふりしぼって答えようとしていたから。 ・うれしかったと思う。なぜなら、「うなぎのつぐない」のために、これまで自分のしてきた行動が報われたと感じたと思うから。	自己理解② ・意見交流の前に、自分が課題に対してどのように考えるか、一人一人が言語化することを重視する。単語レベルでも良いので、自分の考えをもっておくことで、他者との意見交流の際の考えの深まりの実感につなげる。 ・まずは「思い」を考えさせ、次にどうしてそのように考えたのかという「理由」を考えさせる。 ・「理由」は、必ず本文中の叙述を根拠として考えるよう促す。その際、「6」の場面だけでなく、文章全体を根拠としてよいことを伝える。 ・自分の考えをまとめることが難しい児童には、まず、うたれたごんの「気持ち」を単語でまとめさせる。その後、どうしてそう思ったのか、根拠となる本文中の叙述を抜き出させる。 ・これまで自分で書き溜めてきた「ごん日記」を参照しながら、本時の「ごん」の思いに迫ってもよいと声をかける。 ○文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもっている。（発言・ノート）

	5 交流の3つの視点を確認する。 ①自分になかった友だちの考え「なるほど!」 ②納得した友だちの考え「たしかに!」 ③自分の考えが深まりそうな友達の考え「それいいね!」 6 友達と考えを交流する。 7 全体で考えを交流する。	・交流の視点を確認して、「自分の考えを深めるため」という交流の目的を意識できるようにする。 ・交流の際、「気持ち」だけでなく、「理由」にも着目するよう促す。同じ「気持ち」でも、「理由」も同じとは限らないため、自分とは異なる考えを受け入れる姿勢を価値付ける。 ・ペアの交流を複数回行い、多様な考えや根拠にふれる機会を増やす。 ・友達の考えもノートに記録させ、自分の考えが深められるようにさせる。 ・多様な考えが取り上げられるよう、意図的に指名する。
終末	8 本時の学習を振り返る。自・他 【振り返りの視点】 ①今日の授業で分かったことや考えたこと ②友達の考えを聞いて考えたこと ③今後の授業や生活で取り組みたいこと	他者受容② ・他者との関わりが自分の考えにどのような影響を与えたのかを自覚できるように、視点を明確にした振り返り活動を設定する。 〇文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付いている。(振り返り)

(3) 板書計画

